

方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
音順	傷寒論・金匱要略条文
	読み および解説・その他
に	<p>人参湯 (理中丸・理中湯) 五苓散</p> <p>理中丸 人参(甘微寒)・甘草(甘平)・白朮(苦温)・乾姜(辛温)各3g 理中丸の場合は 上の4味を搗いて篩い粉末として、蜜とよく混和して鶏卵の黄味位の大きさにして、沸湯数勺の中に1丸を内 れて解く、砕いて温かい中に服用する。昼間に3回、夜2回服用する。服用して腹中が温まらないものは3、4 丸を余分に服用させる。しかし効果は湯薬には及ばない。湯薬の煎じる方法は4味を3gずつ取り、水320ml を以って煮て120mlに煮詰めて滓を去り、1日3回に分けて温服する。 湯を服用して20～30分してから温かい粥を茶碗に一杯位飲んで身体を温める。衣服はいではならない。 人参湯の場合は 上の4味を水320mlを以って煮て120mlとなし、滓を去り1日3回に分けて温服する。</p>

弁霍乱病脈証併治第十三第6条(傷寒論)

「**霍乱頭痛**、**発熱**、**身疼痛**、**熱多く**、**水を飲まんと欲する者は五苓散之を主**る。**寒多く**、**水を用いざる者は、理中丸之を主**る。」

解説 霍乱で、頭痛して、熱を發し、身体がうずき痛む者は、表に寒があつて、裏に熱があることによって生ずる。熱の症状が多くて水を飲みたがる者には、**五苓散**が主治する。寒の症状が多くて、水を飲みたがらぬのは、**理中丸**が主治する。

理中丸加減方

臍の上が脈を打つものは、腎気の異常による動悸である。**理中丸** 一**白朮** +**桂枝** 4gとする。

吐くことが多いものには **理中丸** 一**白朮** +**生姜** 3gとする。

動悸がするものには **理中丸** +**茯苓** 2gとする。

咽が渇いて、水を欲しがるとは **理中丸** +**白朮**を加え全量を4.5gとする。

腹中痛むものは **理中丸** +**人参**を加え全量を4.5gとする。

腹中の冷えるものは **理中丸** +**乾姜**を加え全量を4.5gとする。

腹滿するものは **理中丸** 一**白朮** +**炮附子** 0.2gとする。

湯を服用して後20～30分してから温かい粥を茶碗に一杯位飲んで身体を温める。衣服を剥いではならない。

「方劑決定のコツ」の注釈

熱多くは、胃に熱がこもって起こる症状で、寒多くは、中焦の内寒による症状である。

五苓散は、**桂枝**・**白朮**で外を暖め、**沢瀉**で内熱を去る。

人参湯(**理中湯**)は、**白朮**で外を温め、**人参**で裏の虚熱を鎮め、**乾姜**で内寒を除く。

五苓散証の場合は

太陽病表証が解除しなかつたり、或いは発汗法を行つても方法が妥当でなかつたりすると、太陽経の熱邪が、経脈を伝わつて裏の膀胱に入り、膀胱の気化作用が障害され、水は下焦に蓄まり小便不利となり、下腹部が膨滿する(少腹滿)。また津液が体を循らなくなるので水が上に昇らず、煩渴して、水を飲みたがり飲んでも渴は癒やされず、飲んだ水は、吸収されず上逆して、飲めば即座に嘔くという水逆の証となる。この場合、ゲゲエ言わずにすんなり嘔吐する。また表証も残っているので、脈浮、または脈数で、少し表熱もある。また下焦が水浸しになるので下痢する。下痢は水様便で腹痛はない。この様に、太陽経の熱邪と水が、下焦で結合したものを太陽蓄水証といい、**五苓散**が主治する。また膀胱湿熱を伴った場合は、**猪苓湯**を用いる。

理中丸(**人参湯**)証の場合は

脾胃虚寒があり、脾胃の陽気不足による運化障害のために、寒湿困脾となり、口渴は無く、水湿が滞つて胃寒(胃部が張つて、冷えて痛む)がある場合は、**平胃散**を用いる。更に、寒が多い太陰病脾虚寒では、寒湿が生じ易く、下焦が水びたしとなり、霍乱(下痢が生じ、寒湿が上逆して嘔吐し、悪心も伴う)が生じる。口渴は無く、寒湿のために嘔吐し、下痢は無いが、非常に軽い。胃虚寒が主な場合は、**呉茱萸湯**を用いるが、冷えると腹痛、下痢を起こし易く、胃が痞えた感じがして、少食、また胸の中も痞えて、身体がだるく元気がないなどを伴う場合は、**理中湯**(**人参湯**)を用い、更に表証を伴う場合は、**桂枝人参湯**を用い、寒が多く症状が激しい場合には、**附子理中湯**を用いるとよい。

参考 霍乱は、下痢、嘔吐の激しい病で、霍乱には、表証と、裏証の2種類があり、表証で熱が多い**五苓散**証と、裏証で寒の多い**理中丸**(**人参湯**)証の他に、少陰病の**四逆湯**証・**四逆加人参湯**証・**通脈四逆湯**証でも見られる。

「方劑決定のコツ」の注釈

三焦は、水穀の道路をいい、邪が上焦にあれば吐いて利せず、邪が下焦にあれば利して嘔せず、邪が中焦にあれば吐いて利すのであり、飲食を欲せず、寒熱を調節出来ずして霍乱を起こすと考えられる。とすれば、**五苓散**と**理中丸**との違いは、嘔と、下痢に対して、胃の虚熱を取り、津液の循環をよくして邪を散ずるのが、**五苓散**で、**理中丸**は、胃を温めて津液の循環をよくして、温めて治するということになる。

理中丸(**人参湯**)証

新古方薬囊によれば「裏に寒があつて、胸中が痞える者、胸中に痛みのある者、唾多く出でて止まらない者、腹中痛んで、手足冷え、下痢し易き者、胃中塞がりたる感ありて、ムカムカし易い者。」と記されている。

弁陰陽易産後勞復病脈証併治第十四第5条(傷寒論)

「大病産後 **喜唾**、**久しく了了**たらざる者は胃上に寒有り。当に丸薬を以て之を温むべし。**理中丸**に宜し。」

解説 大病が治つても身体が十分に回復せず、脾虚寒証が残り、運化障害のために、水湿が滞つて寒湿困脾となり、また胃の陽気不足のために胃部が張つて、冷え、痛む胃虚寒になると、滞っている水湿が口にあふれることになり、唾液がダラダラと絶えず出る様になる。また胃虚寒証の他の症状として、胃部が張つて、冷えて、痛みが生じるはずである。この様な状況の時は、当然、丸薬でこれを温むべきである。それには**理中丸**がよい。

「方劑決定のコツ」の注釈

大病の後は、血気が虚して、寒を生じ易い。風に当たつて皮膚を冷やしたり、陽気を虚させたり、冷たいものを服んだりすると、その寒が、身体にうんと影響を及ぼすと同時に、胃の虚冷によって水を散ずる力が減じて、その水が、上に湧出して喜唾をなすのであるから、**人参湯**で胃の冷えを治すれば良いのである。

人参湯は、中焦を温め、よつて体液を全身にめぐらす薬方である。

参考 胃寒で嘔吐、頭痛がある場合には、**呉茱萸湯**を用いるとよい。

裏虚寒による慢性の下痢があり、頭痛があつたり、また表証(頭痛、悪寒、発熱)があつて、裏虚寒の証を伴う時には、**桂枝人参湯**を用いるとよい。

人参湯
枳実薤白桂枝湯

人参湯の場合

人参（甘微寒）・甘草（甘平）・白朮（苦温）・乾姜（辛温）各3g

上の4味を水320mlを以って煮て120mlとなし、滓を去り1日3回に分けて温服する。

枳実薤白桂枝湯の場合

枳実2・8g・厚朴4g・薤白8g・桂枝1g・栝楼実5g

うえの5味を水200mlを以ってまず枳実・厚朴の2味を煮て80mlを取り、滓を去って諸薬を内れて煮ること数沸し滓を去って3回に分けて温服する。

胸痺心痛短気病脈証併治第九第5条（金匱要略）

「胸痺心中痞留気結ぼれて胸に在り胸満脇下心を逆槍するは枳実薤白桂枝湯之主^{つかさど}。人参湯も亦之を主^{つかさど}。」

解説 胸痺の病で、心中に痞えた様な感じがあり、何か胸中に陽気が留まっていて散らず、従って胸中に一杯詰まっている様で、締め付けられる様に苦しい、そして脇腹から胸中にかけて、突き上げられる様な痛みのする者（心を逆槍するとは、左から右側の肩にかけて突き上げることをいう）に枳実薤白桂枝湯が主治する。人参湯もまた主治する。

胸痺の病で、胸中の気血の上昇、下降が阻害されて心中が痞えた様な感じがあり、胸中に気血が留まっていて散らず、また肺に濁痰があるために胸中に一杯詰まっている様で締め付けられる様に苦しく、そして中焦（脾胃）は熱を持っており、この陽気（熱）が滲漏して、肝にも充満し、心を衝き上げるために、脇腹から胸中にかけて突き上げられる様な痛みを覚える者は枳実薤白桂枝湯が主治する。この場合の胸痺は殊に夜間に激しい病状を起こすものが多い。胸痺に類似したもので、中焦（脾胃）の裏寒による胃痛があり、これが原因して厥心痛となったものには人参湯が主治する。

「心中が痞す」とは、胸中で気血の上昇、下降が阻害されることで、これを留気と称している。

「胸満」は、肺に濁痰があることを言っている。

「脇下より心を逆槍する」とは、中焦（脾胃）に熱を持ち、この陽気（熱）が滲漏し肝に充満して心を衝き上げることを行っている。

枳実薤白桂枝湯は、心臓病や喘息などで、胸苦しく、心下から胸の中央や咽喉まで詰まる感じのする時、また肩まで突き上げる様な痛みを覚える時に用いる。

枳実薤白桂枝湯の栝楼実は肺の濁痰を去り、枳実・厚朴で脾胃の陽気が滲漏するのを復帰せしめて、肺・肝の満を去り、桂枝・薤白は心陽を助けて気血の循環をよくする。

枳実薤白桂枝湯証

新古方薬囊によれば「胸痺の病で心中に痞えたる様な感があり、何か胸中にいっぱい詰まっている様で締め付ける様に苦しく、時に脇腹から胸中へ突き上げられる様な痛みのある者、本方の証も殊に夜間に劇しき病状を起こすもの多し。」と記されている。

人参湯証

新古方薬囊によれば「裏に寒があつて胸中が痞える者、胸中に痛みのある者、唾多く出でて止まざる者、腹中痛み手足冷え下利し易き者、胃中塞がりたる感ありてムカムカし易き者。」とある。

参考 枳実薤白桂枝湯は、中焦に熱を持って胸痺の病を起こして、殊に夜間に激しい病状を起こすものが多い。人参湯は中焦の裏寒によって、胸痺の病を起こしている。

厥心痛は、寒厥心痛と、熱厥心痛とがある。

寒厥心痛（冷心痛）は、心痛が突然に起こり、その痛みが背にまで及ぶ、或いは痛みが綿々として続く、更に手足厥冷、冷や汗出で、小便清利し、或いは大便利して、渴せず、気力衰えて脈も沈、細にして無力となる。陽を扶け、寒を散ずる理中丸（人参湯）を用いる。

熱厥心痛（熱心痛）は、暑毒が心に入り、或いは常に熱薬を服したり、熱食をすることにより、熱が鬱して痛みをなすもので、症状は、胃心下部が灼熱劇痛し、熱いものをいやがり、冷たいものを喜び、痛みに休作あり、或いは面目赤黄、身熱煩躁、掌中熱、大便硬を伴う。解鬱泄熱の承気湯類を用いる。